

3月末に永眠したが、精神的には最後まで安定を保っていた。

患者の不安を助長し、スタッフを混乱させた原因の一つとして、LAMが比較的稀な疾患で原因不明であり、治療も対症療法であるため、本人にもスタッフにも情報提供が限られたものとなっていた点が挙げられる。本症例への対応を通し、稀な身体疾患に対するリエゾン精神医学的アプローチについて検討したい。

10. 色素性母斑のコンバインド・レーザー治療

(形成外科学)

岩坂 督・

河野太郎・野崎幹弘

〔はじめに〕一般的に色素性母斑に対してはレーザー治療の適応でないとされている。今回我々は2種類のレーザーを組み合わせ(コンバインド・レーザー)、同時期に照射することにより良好な結果を得られたので報告する。

〔対象〕過去3年6カ月にレーザー治療を行った161症例の色素性母斑である。年齢は0歳から55歳までで平均11歳、性別は男36人、女125人、部位別は頭頸部が92人、体幹25人、四肢44人であった。

〔方法〕レーザー装置は東芝製LRT-301AおよびLRT 301 A-QSを使用した。ノーマルモード・ルビーレーザー20Jで照射後、表皮を手動的に剥離する。即時的にQスイッチ・ルビーレーザー7Jで多重照射(4,5回)する。これを3,4週間ごとに繰り返す治療を行った。

〔結果〕著効25.4%、有効58.2%、やや有効14.2%、無効2.2%と従来に比べ高い有効率を示した。

〔まとめ〕①今回我々はノーマルルビーレーザーで表皮剥離後、Qスイッチ・ルビーレーザーを追加照射することにより真皮内の母斑細胞をより効果的に減少でき、有効率80%以上と良好な結果が得られた。②追加照射を1回でなく、3~4回することにより更に真皮内の母斑細胞を減少できた。③治療期間は平均6ヵ月と従来に比べ短期間で治療可能であった。

11. 当院における小児持続硬膜外麻酔の現状

(麻酔科学)

錦織知弘・

池田みさ子・鈴木英弘

成人における硬膜外麻酔を用いた周術期管理の有効性については確立されている。当科では1995年より小児に対しても術後管理に、より有効と思われる術式に対し持続硬膜外麻酔を施行してきた。そこで、今回生後6ヵ月から12歳以下までの25症例について術中・

術後管理上の有効性と安全性について検討を行った。

対象症例は膀胱尿管新吻合術14例、胸骨拳上術5例、その他6例であった。硬膜外穿刺はTh11/12からL4/5であった。合併症として25例中1例に硬膜穿刺を認めた。痙攣・嘔吐も、硬膜外膿瘍、脊椎損傷等の重篤な合併症もなかった。

有効性の評価は、膀胱尿管新吻合術の14例について持続硬膜外麻酔使用例と非使用例で比較検討した。硬膜外麻酔使用により術中全身麻酔薬(吸入麻酔薬)の濃度は減少し、術後鎮痛薬(座薬)の使用量も硬膜外麻酔併用により非使用例に比し有意に減少した。

小児における持続硬膜外麻酔による周術期管理では、重症合併症の発生はなく有効性が確認された。今後さらに慎重かつ積極的に適応を拡大したい。

12. 新しいIVR—磁石圧挫吻合術—(山内法)

(放射線医学)

山内栄五郎・杉浦孝司・

中村龍治・藤村幹彦・山田隆之・

酒井文和・大川智彦

インターベンショナルラジオロジー(IVR)の発達により、手術が必要な疾患がIVRにより手術することなく治癒することも、しばしば経験されるようになってきた。しかし、吻合術のみは外科のみに許された手技と考えられていた。今回、我々は磁石を用い手術することなく吻合するIVR手法の基礎的研究を終え、臨床に応用し素晴らしい成績をあげたのでここに報告する。

対象となった疾患は50~87歳の患者6人で、総肝管-十二指腸吻合部術後閉塞、総胆管-拳上空腸吻合部術後閉塞、腹腔鏡下胆嚢摘出術後総胆管閉塞、慢性膵炎に伴う総胆管閉塞、術後イレウスなどの症例である。総胆管内へは経皮経肝的胆管ドレナージ(PTCD)チューブより総胆管盲端部分へ磁石を入れ、もう一方の磁石は内視鏡で持っていくか、あるいは飲ませて体外磁石誘導により吻合する部分まで持っていった。イレウスの症例では飲み込ませた磁石を体外誘導によりイレウス狭窄部手前まで誘導し、もう一方の磁石を大腸ファイバーで持ってゆき吸着させた。全ての症例で吻合に成功し、留置後の軽い腹痛の他は漏出などの合併症は認められなかった。

山内法は今後のIVRの基礎を担うと考えられる大きな技術の一つであり、今後各方面で幅広く応用されるものと考えられる。